

イザヤの預言の主要な特徴

イザヤの預言という古代の文書はまるで謎のようなものです。しかし、イザヤの預言の基本的概念を学ぶことで、それらの謎が解けていきます。これらの謎は文学的構造、聖書における予型、および文体の分析など異なった文学的分析手法を応用することによって明らかになってきます。それぞれの分析方法はそれら特有の見方と情報を与えてくれるのです。

1. イザヤの預言は同時に二つの時間枠に関連している

わたしがエルサレムで在籍していたラビ養成学校の校長は、イザヤの文書は以下の二つの異なる時間枠に同時に当てはめられると教えていました。(1)イザヤが生きていた時代、(2)「終わりの日」すなわち「終末」(‘*aharit hayyamim*)。どうしてそれが分かるのかと尋ねると、証拠は何一つないが、それがユダヤの伝統だと校長は言うのでした。それから数年後、博士課程で学んでいる間に、わたしはイザヤ書全体の文学構造の中にその証拠を発見しました。これらの発見を踏まえると、イザヤ書を解釈する際のルールが根底から変わります。*線形構造*は、イザヤが生きていた時代を皮切りに、何世紀にもわたる出来事のサイクルを詳しく描き出しています。さらに、そうした線形構造の上に何層にも重なり合っているのが*同期構造*です。同期構造は、イザヤ書全体を一つのシナリオと見なしています。そして、そのシナリオの時間枠は、まさに終わりの日、すなわち終末なのです。(アブラハム・ギレアディ博士著、『イザヤの文学的メッセージ』*The Literary Message of Isaiah* 参照)

このことは、イザヤ書のメッセージがどのように終末に関連しているのかを知るためには、この書物についての考え方を見直す必要があることを意味しています。ヨハネと同様に、イザヤは示現の中で世の終わりを見ました。イザヤの同期的文学構造により、彼の書は終末預言へと一変するのです。しかし、その預言は歴史に、すなわちイザヤが生きていた時代とその直後の時代の出来事に根差したものであるため、「そうした古代の国々は、終末とどのように関連しているのか」といった疑問が生じます。それぞれの国名は、それらの国家がもはや存在しない終末の時代にも当てはまるのでしょうか。その答えは、終末の状況においては、それらの古代の名前は暗号名として機能するということです。とはいえ、それらの名前は今日同じ名前を持つ国々と混同してもよい、あるいはイザヤの預言の対象を中東地域に限定するべきというわけではありません。

イザヤが用いた暗号名を解明するための鍵は実にシンプルです。イザヤの時代に存在した国家に関する彼の描写と、今日の世界に存在する国家を引き比べてみてください。例えば、エジプトはイザヤの時代における強力な超大国であったにもかかわらず、当時、霊的、経済的、政治的に衰退の一途をたどっていました。それまでエジプトは、常にもう一つの超大国であったアッシリアに対抗する防御の国でし

た。アッシリアは当時知られていた世界の征服を目指して北から攻め来る軍国主義国家であり、やがては実際に世界征服を達成しました。そのためイザヤは、アッシリアによる古代世界の滅亡を、終末における滅亡の隠喩として用いています。過去に起きたことが再び起こるのです。ただしこの度舞台となるのは、新たな「アッシリア」と新たな「エジプト」です。

終末において役割を果たす、その他の国々や人物についても同じことが言えます。イザヤがどのようにそれらの特徴を描写しているかを見ると、それらがどの国、あるいは人物を指すのかが分ります。新たな「アッシリア」と「エジプト」が敵対する二つの政治的実体として登場するのと同様に、新たな「バビロン」と「シオン」もまた、相対する二つの霊的実体として登場するからです。イザヤはその文学構造によって、バビロンを民と場所の両義において定義しています。すなわち、罪悪が熟した世界とそこに住む邪悪な住民たちについて明らかにしており、神はソドムとゴモラにされたようにこれらを滅ぼされます。イザヤはシオンについても、民と場所の両義において定義しています。すなわち、悪い行いを悔い改める人々、また

終末に追放された状態から戻って来てシオンへ逃れて行く人々について明らかにしています。そうした文学的な定義を用いることで、イザヤは世界に存在するすべての人々について述べているのです。ですから、彼の書はおもにユダヤ人について述べていると決めつけるのは誤りと言えるでしょう。

2. 契約に関するイザヤの神学は、皇帝と家臣との間の取り決めに類似している

ヘブルの預言者というと、一般的には、さまざまな観念を生み出した人々、言わば古代ギリシャの哲学者のような人物であると考えられがちかもしれません。しかし、預言者たちは、数多くのきわめて道理にかなった観念を教えながらも、人生については、自らの論理の力によって答えを見いだそうとはしませんでした。むしろ、彼らは天地の創造主である神からの啓示に基づいて、霊的な遺産を築いたのでした。そうした啓示の土台の上に、彼らは神について、人類について、そして永遠に関する事柄についての理解を構築し、展開させていったのです。にもかかわらず、こうした神聖な起源にそぐわないように思われるのは、預言者たちが神とその民との関係を定義するうえで、古代中東における皇帝と家臣の関係を定めた規範を用いている点です。そうした皇帝と家臣という典型はイスラエルの契約に関する神学の中核を成すものであることからすると、これもまた神に由来しているのでしょうか。

古代中東における皇帝と家臣の関係は、皇帝が一人または複数の家臣を任じ、彼らに自らの権限の下でその帝国内を治めさせることにより成り立っていました。皇帝は、それぞれの家臣を自分の帝国の一所領に配属し、その地の王として治めさせたのです。こうした「約束の地」は幾つかの町や村が隣接した都市国家から成っており、皇帝と交わした条約または契約により家臣のものとなりました。しかし、その契約は条件付きのものであって、家臣が皇帝に忠実であり続け、その忠誠をささげる相手を別の皇帝に変えることがないかどうかにかかっていました。条約の文言によると、家臣が皇帝の命令、すな

わち契約の条件を守るならば、彼は皇帝を「愛している」と見なされるのでした。家臣が契約の条件に従順であるか、あるいは不従順であるかによって、祝福あるいは呪いがもたらされたのです。

忠実な家臣が重大な脅威にさらされると、皇帝は「王の王」、「主の主」として自らの軍隊を招集し、その家臣を守りました。家臣の命を脅かす者は誰であろうと、皇帝と家臣の「共通の敵」と呼ばれ、滅ぼし尽くされるのです。ある家臣があらゆる状況下で皇帝に忠実であることを証明するならば、やがて皇帝はその家臣を合法的に自身の「息子」としました。その時点で、皇帝と家臣の関係は「主従関係」から「父子関係」へと変わります。それまでは、家臣と皇帝との間で結ばれた契約は条件付きのもので、家臣が皇帝に忠実であり続けるかどうかにかかっていました。しかし、今やその契約は無条件、あるいは「永遠」のものとなり、その子孫に受け継がれる祝福となったのでした。

家臣が皇帝の律法を守り、家臣の民が家臣の律法を守るとき、皇帝は家臣の民を守りました。イスラエルの民がペリシテ人のせいで重大な危機に直面した際に、イスラエルの長老たちが王を求めた背景には、このような考え方があったのです。神がダビデ王と交わされた契約は、その後、おもに神の守りを得るための手段となりました。その契約の条件下で、王は神の家臣となり、神がイスラエルの皇帝とされたのです。ヒゼキヤ王とその民が18万5,000人から成るアッシリア軍の侵略によって重大な脅威に直面したときに、ダビデの契約の保護条項が適用されたことがイザヤ書から分かります。ヒゼキヤが神の律法を守り、民がヒゼキヤの律法を守るとき、神の天使が一晩のうちにアッシリアの軍勢をことごとく滅ぼしたのです。

3. イザヤは歴史上の前例を将来起こることの予型として用いている

ヘブライの預言者たちは、神から与えられた啓示を一言一句正確に書き記したのか、それとも自分自身の思いや考えを付け加えたのか、疑問に思ったことはないでしょうか。例えば、イザヤは靈感を受けた神の預言者であると同時に、非凡な文才の持ち主でもありました。彼の書には、何層にも重なった文学手法がはっきりと見て取れます。こうした預言の手法は、イザヤが自分の受けた啓示を体系的にまとめるに当たり、驚くほど熟慮を重ねたことを示しています。できるだけ少数の言葉で最大量の真理を伝えるべく、イザヤは自身の預言の目的に合わせて古代中東のあらゆる文学形式を用いています。イザヤは彼より前の預言者を土台としてその上に築き上げながらも、先人、後人を問わずどの預言者をもしのいでいます。複数の「イザヤ」が存在したと主張する人もいます。しかし、彼の書に見られる何層にも重なった文学的特徴は、そうした仮説が誤りであることを証明しています。

イザヤが用いた文学手法の一つは、古代の出来事によく似た終末の出来事を預言するというものです。実のところ、イザヤは預言する際に、そうした手法しか用いていません。このようにして、彼の預言はヘブライ人の預言の伝統にしっかりと根差したものでありながら、どれもが慣れ親しんだものに思え

ます。要するに、過去に先例となったものは何であれ、将来の予型またはパターンとなり得るということです。そうした予型の上に、イザヤは自分の預言を築き上げているのです。例えば、彼が古代の人物や国家の名前に言及しているときには、その人物や国家は終末における何事かを象徴する先例となっています。歴史は繰り返されると言われます。しかし、過去に起こったことがすべて繰り返されるわけではないので、イザヤは、将来似たようなことが再び起こると自分が知っているかどうかによって、歴史を選んで用いています。

イザヤ書には古代の出来事の新しいバージョンとなる出来事が30以上も登場しており、そのどれもがイスラエルの歴史上重要な出来事の繰り返しとなっています。イザヤはそれらの出来事に関する預言を自分の書のあちこちに散りばめています。それらをまるでドミノのように相互に関連づけているのです。例えば、ある一節では幾つかの出来事が組み合わさっていると思える一方で、ほかの節では別の組み合わせが用いられているといった具合です。そうやって最終的には、新たな大混乱、創造、樂園、ソドムとゴモラの破壊、束縛、過越、大移動、荒れ野におけるさすらいの旅、地の征服、地の受け継ぎ、神殿の再建といった、すべての出来事に記述が及んでいます。これらの出来事はすべて再び起こりますが、一つの壮大な終末のシナリオの中で世界がイスラエルの歴史を再び繰り返すときに、それらの出来事が起こる順番は古代とは異なっています。実に、そのシナリオ自体が「終末」を定義づけるものなのです。

イザヤが預言するとおり歴史は繰り返され、全人類がその渦に巻き込まれていくこととなります。しかし、それはイザヤが考えたシナリオではありません。将来待ち受けている事柄についてほとんど、あるいはまったく知らない、ただの人にはすぎない予知者たちとは違って、イスラエルの神こそが前もって「終わりのことを初めから」告げてくださる御方です(イザヤ46:10)。神は、終わりのことが初めのことの中に含まれているという方法で人類の歴史全体を取り仕切っておられるのです。つまり、神が引き起こされた先の出来事は、終末に起こる出来事を予示するものであるということです。イスラエルの神の言われるところによると、そのようなことができる能力こそが、神御自身の神性を証明するものなのです。そうした昔の出来事が再び起きるとき、人々はもはや、イザヤの警告に心を留めずにいることへの言い訳ができなくなります。実際のところ、将来を象徴している過去の人物や出来事について再確認すると、まがい物を識別する助けになります。神からのものではない事柄、また過去の範例から逸脱している事柄を見分けるのが容易になるからです。

4. 人々に関するイザヤの特徴描写は七つの霊的な段階を明らかにしている

イザヤ書に描かれている人々は、ただ偶然に登場しているわけではないことを知ると驚かれるでしょうか。イザヤは自分が生きていた時代に実在した人々を描いていますが、それらの人々はさらに、終末において同様の役割を担う人々それぞれの典型でもあるのです。彼らはまた、霊的に異なった各区分

の人々を表す事例でもあります。イザヤは時折、神を信じる人々を言い表すために、「ヤコブ」および「イスラエル」という対を成す名前を用いていますが、別の折には同じく対を成す「シオン」および「エルサレム」という名前を用いています。その違いは何でしょうか。さらに詳しく見ていくと、ヤコブおよびイスラエルという名前は、物質主義的な区分に属する神の民を指していることが分かります。彼らが行う現代版の偶像崇拜は、彼ら自身を霊的な盲目に陥らせます。彼らは目覚める必要があります。そうしなければ、世に訪れようとしている神の裁きの日を生き延びることはできないでしょう。

実のところ、ヤコブ/イスラエルの区分にいる人々は、より低い区分、すなわち虐げる者や悪事を働く者の区分であるバビロンにまで降下する傾向があります。そのほかの人々は、悪事を悔い改める者、神への忠誠を試される時に忠実であることを証明する者の区分であるシオン/エルサレムへと上昇します。そうするときに、神は彼らの罪を赦し、彼らを御自分の契約の民として認めてくださるのです。さらにイザヤは、世界が二つのグループに分極化される、終わりの時に起こる事柄を告げています。神の裁きの日、バビロンの区分に属する人々はすべて地上から消滅します。神によって救い出されるのは、シオン/エルサレムとさらに高い段階の区分に属する人々のみだからです。その間に位置するヤコブ/イスラエルの区分の人々は、中間層に属する人々がすべて消滅するときに姿を消すこととなります。その段階にいる人々は、シオン/エルサレムに上昇するか、あるいはバビロンに降下するかの選択を迫られるのです。

シオン/エルサレムよりさらに高い区分には、神の「僕たち」および「息子たち」が含まれます。シオン/エルサレムの区分に属する人々の中には、個人的な契約関係にあつて神に仕えることにより、次の霊的段階に上昇する者たちもいます。例えば、エホバが地上で統治するために来臨される日に向けて道を備える、終末における神の僕がそうです。彼がその務めを果たした結果として、僕および息子たちから成る区分全体が出現するのです。現世にかかわる救い手であるその僕は、あらゆる国々からシオンへと向かう新たな大移動において、人々を救い出します。その務めは、モーセがイスラエルの民をエジプトから救い出し、約束の地へ導いたのとまさに同じです。神の僕および息子たちは、彼らの皇帝であるイスラエルの神と交わした条件付きの契約関係の状態から、さらに上の段階に上昇します。あらゆる状況下で忠実さを証明することにより、彼らの契約は無条件のものとなり、彼らは神の選民となります。

話はまだそこで終わりません。息子たち/僕たちの上には、天の御使いとしての役割を果たす、セラフ(天使)たち/救済者たちがいます。そして、彼らのさらに上には、イスラエルの神、シオンの王であられるエホバがおられるのです。この霊的なはしごを一段ずつ昇って行くことを、イザヤは、上昇して行く人にとっての再生、あるいは再創造として描いており、はしごを昇るごとに、志願者は新たな名前を授けられ、さらに霊的に高い務めに任じられます。また、志願者は上昇する度に、より高い契約にかかわる、より高い律法を守ることとなります。さらに、それぞれの上昇には一時的な降下が伴いますが、そのような降下が起きるのは、ますます厳しさが増していく一連の試練を通して、神が志願者の忠実さを試さ

れるときです。そうした試練はしばしば、降下していく区分に属する者たちの手によってもたらされま
す。最も低い区分は「滅び」と同等であり、悪事を謀り、主導する人々から成っています。

5. イザヤは二種類のメシヤに関する預言を提示している

多くの人は、メシヤに関する預言はすべて同等のものであると見なしていますが、実際にはそうでは
ありません。重要な違いがあるのです。メシヤに関する事柄について、ユダヤ教徒とキリスト教徒の見
解が一致しないのはなぜでしょうか。ユダヤ教徒は自分たちの聖文に精通していますし、メシヤに関す
る預言は彼らに由来するものです。ユダヤ教徒の最も聡明かつ献身的な学者たちは、預言者らが書き
残した記録を熱心に分析し、後世の人々に忠実に伝えてきました。それに比して、異邦人と見なされて
いるキリスト教徒は、それらの預言を生み出したわけではありません。それでもキリスト教徒はしばし
ば、まるでイエスを自分たちのメシヤとして信じることだけが大事であって、そうしさえすれば自分た
ちには、あたかもユダヤ人の聖文を取り上げて、その時その時ごとに自分たちに都合の良い解釈を何で
あれ福音として教える特権を与えられているかのような態度をとるのです。

よく調べてみてください。そうすれば、イザヤは二人の別個の人物と、二つの明確なメシヤの役割に
ついて語っていることが分かるでしょう。一方は現世の事柄にかかわるものであり、もう一方は霊的な
事柄にかかわるものです。預言がなされている文脈にも留意してください。文脈を無視して解釈するこ
とも、異邦人がやりがちなことの一つです。例えば、神はある場面では御自分の「僕」について語り、別
の場面では御自分の「息子」について語っておられます。とはいえ、いずれの場合もその背景となるの
は終末におけるイスラエルの回復であって、その本質は現世にかかわる事柄です。その場合、神は二
人の異なる人物についてではなく、ただ一人の人物について語っておられるのです。とりわけ、「僕」お
よび「息子」という言葉は、個別にではなく、ともに主君に対する家臣の関係を定義づけるものだからで
す。さらに言うと、神は御自分の民を教え導くに当たり、同時に複数の預言者を召されることはありま
せん。モーセの場合と同様に、一時に召される預言者は一人だけです。

もう一つの側面を見てみましょう。イザヤは終末におけるイスラエルの回復について頻繁に予言して
いますが、その回復において、神の僕および息子は人々を束縛から解放し、イスラエルの諸部族を結
束させ、敵に打ち勝つといった数々の働きをすることが分かっています。しかし、イザヤは終末について
預言をするに際し、過去の予型を使うという方法のみを用いていることを鑑みると、それらのことすべ
てを行う一人の人物の予型を過去のどこから見つけ出せたのかという疑問が生じます。そのような人
物は存在しないのですから。そうした場合、イザヤは複数の予型から成る複合体を創作し、その人物の
中に終末の指導者の姿を重ね合わせています。過去に複数の指導者が行ったことを単独で成し遂げ
る人物像を創り上げているのです。さらに、神の民が連れ戻されるときに、神の僕および息子は過去の
指導者たちが行ったことを行うだけでなく、それぞれの人格的特徴をも体現します。そうした理由か

ら、イザヤはその僕を、アブラハムやモーセ、ヨシュア、ダビデ、ヒゼキヤ、クロスといった人物の複合体として描いているのです。

クロスの名が挙げられているのは、そのパターンに合致しないと思うかもしれませんが、しかし、よく調べていくと、イザヤが言及している「クロス」は決して単なる歴史上の人物ではなく、複合的な人物像であることが分かります。ある場面ではクロスとモーセの予型が組み合わされており(イザヤ 44:27-28)、別の場面ではクロスとダビデの予型が組み合わされています(イザヤ 45:1)。実のところ、神が御自分の僕および息子について語っておられないのはイザヤ 53:1-10 だけであって、霊的なメシヤについての預言が見られる聖句はこの聖句のほかにはありません。イザヤ 53:1-10 でイザヤが描いている人物とは、ほかならぬエホバ御自身です。エホバが地上を統治するために来臨されるのに向けて人々を備えさせる神の僕および息子について書かれているわけではありません。イザヤ書 14 章に記されたバビロンの王と、イザヤ書 52-53 章に記されたシオンの王を並列させる文学構造により、その人物はシオンの王であるイスラエルの神であることが明確にされているのです。

6. イザヤは終末に登場する重要な人物たちの別名として隠喩を用いている

あるラビから、イザヤが述べている清い動物は神の民イスラエルを指しており、清くない動物は異邦人を指していると聞き、わたしはその教えにすっかり魅了されました。この教えによって、雄牛やろばといった動物に、また子羊と獅子の間に調和が存在するという福千年の理念に、新たな意味がもたらされました。そのラビが教えてくれたことの多くは覚えていませんが、彼が植え付けてくれた教えの種は後に良い実を結びました。後にわたしは、イザヤ書の中には、数々の同義的並列詩行から成るネットワークが存在することを発見しました。これらの詩行は、一つの事柄を描きつつ別の事柄をも比喩的に意味しているのです。一つの節に複数の意味が含まれている場合もあります。木々が人々を表す場合もあれば、森が町や都市を、山々が国家を表す場合もあるといった具合です。また、終末における重要な人物について、一方は義や光、他方は怒りや激しい憤りといった神の属性を体現していることを発見しました。

しかし、なぜイザヤはこのように回りくどい語り方をするのでしょうか。第一に、イザヤは終末について預言するとき、過去の前例を予型として使うという方法のみを用いています。そのため、そのような予型が存在しない場合には、伝えたいことを表現するために別の方法を見つけなければなりません。第二に、イザヤはあらゆることについて詳しく説明しているわけではありません。彼の言葉を深く調べて信じる人だけが、彼の意図するところを理解するのです。第三に、しばしば一見してまとまりのないように思える彼の文は、その文書自体とそれらを理解する人々を、偏見を持つ無頓着な読者から守ります。それでもやはり、イザヤが用いる方法により、制限が生じてしまいます。終末に起こる出来事で、過去にまったく起こったことがないような出来事を表す場合、どこから予型を見つければよいのでしょうか

か。イザヤはそうした問題を、隠喩、すなわち仮名や偽名として機能する用語を使うことによって解決しています。

神の民が束縛を逃れて地の四方から戻って来たことなど、それまで一度もなかったことをイザヤは知っています。神の民がアッシリアのような超大国を打ち倒したこともありません。それでもイザヤは、イスラエルの歴史という文脈の中で、まさに将来起きるそれらの出来事を預言することができるのです。例えば、イザヤは、エホバが来臨される前に起きる出来事に次のような二人の主要な登場人物が関与するのを見ました。(1)独裁的なアッシリアの王——破壊者と(2)神の僕である息子——救済者です。そのため、イザヤは必要なときにはいつでも、別名という手段によってこれらの人物について述べるのできるのです。旗、手、鞭、杖、口、声、火、そして剣といった用語は、文脈に応じていずれの人物をも指し示します。それぞれの人物がこれらのものを象徴しているのです。一方で、光や鬚といった用語は、これらの敵対する両者の違いを際立たせています。

イザヤが利用しているもう一つの情報源として、古代中東の神話があります。その一例である、バアルとアナトに関するウガリット神話では、海や//という用語によって、バアルが打ち勝たなければならない敵であるカオス(混沌)の神を描いています。したがって、この二つの用語は、アッシリアの王の別名としてイザヤの目的にかなっているのです。また別の例として、海の上に掲げられた神の杖、また//の上に掲げられた神の手は、アッシリアの王(海および//)に挑みかかる、終末における神の僕および息子(神の杖および手)による勝利を示しています。神の怒りと激しい償りを象徴するこの邪悪な支配者は、悪人を罰するための鞭と杖としての役割を果たします。しかし最終的に、神の僕および息子、すなわち神の義にかなった鞭と杖によって、アッシリアの王は打ち倒されるのです。これらの人物の正体を明らかにする鍵は、これらの用語が持つ二重の意味を確立する並列詩行の中に見られます。

7. イザヤによる終末のシナリオは典型的なおとぎ話に似ている

イザヤ書とおとぎ話にはどのような共通点があるのだろうかと思う人がいるかもしれません。その答えは、「ほぼすべて」において共通しているというものです。両者に共通する目的とは、花婿と花嫁が天の宮殿(地上の宮殿でもある)で、その後いつまでも幸せに暮らすことです。しかし、そこにたどり着くために、主人公の男女は数々の危険な道を通り抜けねばなりません。二人は自分たち自身の知恵ではなく、さらに高い所から与えられる知恵に従うことを学ぶ必要があるのです。そうするならば、その後のある時点で自分たちの運命が好転するであろうことを、二人は信じる必要があります。自分たちに降りかかってきた幾度もの困難の時期、虐待、またほかの人の罪悪感を和らげるために甘んじて受けるしかなかった非難、これらのすべてが何のためであったのかが、その時に明らかになるからです。すべてのことは、自分たちの目的を達するためにぜひとも必要な経験だったのです。その経験なくして、二人は

決してその目的を達成することができませんでした。実のところ、自らの人生を振り返ってみるとき、彼らは何一つ変えたいとは思わないでしょう。

おとぎ話にあるように、栄光に満ちた永遠の命への道のりは、涙の道でもあるかもしれません。イザヤ書の七部構成の構造によって、このことが如実に示されています。この構造に見られる七組の相対するテーマは、永続する幸福に到達する道を示しています。すなわち、再生の前には荒廃が、救いの前には苦しみが、昇栄の前には屈辱が、相続の前には^{はいちやく}廃嫡が訪れます。しかも一度だけでなく、人が霊的により高い段階に昇る度に繰り返し訪れるのです。すべては志願者が自分より高位におられる御方の力に身を委ねるかどうか、また一時的な降下を経験する中であって神の勧告に従うかどうかにかかっています。そうするならば、花婿と花嫁のために天に用意された場所で、まさに無限の喜びを享受することになるのです。しかしながら、おとぎ話でもそうですが、そのような栄光に満ちた結末が待ち受けていようとも、そのために必ずしもすべての人が喜んで代価を支払おうとするわけではありません。

イザヤによる終末のシナリオでは、シオンのおとめが物語のヒロインです。このおとめは、悪事を悔い改め、あらゆる状況下でイスラエルの神に忠実であることを証明する人々を表しています。エホバが地上で統治するために来臨される時、彼女は「永遠の契約」によってその花婿であるエホバと結婚します。シオンの王であられるエホバは、御自分がその民のために確立されたのと同じパターンに自ら従うことにより、その栄光に到達されるのです。御自分の花嫁を贖う代価を支払われるときに、エホバもまた荒廃や苦しみ、屈辱、廃嫡などを経験されました。しかしながら、栄光に向かう主の上昇は誰にも増して大いなるものであるため、主が経験される一時的な降下もまた、誰にも増して大いなるものとなるのです。さらに、神の僕たちや息子たちのうちのある者たちもまた、エホバと同様にシオンのおとめと結婚します。自分たちの贖い主の苦しみに似た苦しみを味わうことで、彼らもまた無限の喜びに到達するのです。

神の僕および息子たちに対抗するのは、終末における反キリストである暴君アッシリア王です。この人物はおとぎ話の中で悪人を演じる鬼や巨人に似ています。一方で、魔女や邪悪な継母に匹敵する娼婦バビロンは、シオンのおとめを虐げます。助け手としてやって来る天の御使いは、おとぎ話に出てくる妖精の代父や代母に相当します。彼らが持つ神の力は、悪の形勢を転じる助けとなります。最後には、世界中で人々の二極分化が起こり、醜い義姉妹に相当する人類の大多数は、シオンのおとめに敵対します。しかし、彼女を憎む者たちは皆、滅びる運命にあります。地球が楽園の栄光を得るとき、地を受け継ぐのはシオンを愛する者たちだけだからです。地球における平和な時代である福千年の間、彼らだけがその後いつまでも幸せに暮らすのです。